

令和4年度 奈良市立佐保幼稚園 研究実践概要

園長名 松下 智加  
全園児数 21名

1. 研究主題 「豊か体験活動を通して幼児の主体性を育てる」  
—自ら人・もの・ことと関わる中で—

2. 研究年度 3年度

3. 研究主題設定理由

2年の研究を通して、幼児が人・もの・ことと関わる中で主体性を育むには、保育者が意図をもって援助や環境構成を工夫する重要性を再確認した。保育者の方向性や意図性を検証しながら子どもの姿を見極めると、遊びや活動の中で思考力や判断力、表現力などの基礎を4歳児から培う大切さがわかった。これらのことを踏まえて今年度は、発達段階に応じた援助や環境構成を見直し、発達の連続性を見つめることにした。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

- ・幼児が能動的に人・もの・ことと関わって活動する姿から幼児の経験や学びを見抜き、発達の過程に沿った幼児の主体性を明らかにする。
- ・発達に応じた主体的な姿に導くための保育者の援助や環境構成を工夫し、発達の連続性から検証する。

②研究の重点

- ・研究主題に沿った実践事例と反省・評価を積み重ねていく。
- ・幼児と人・もの・こととの関係性を見極め、学びを明らかにする。
- ・「奈良市こども園カリキュラム」を照らし合わせながら、幼児の発達の過程に沿った主体性につながる姿を捉え、援助や環境構成の工夫を実践し、分析する。

③活動の方法

事例1 【4歳児 5月】 「ロケットみたい！」

～これまでの子どもの姿～  
築山を掘ったりトイを並べたりしてできたコースから水を流したり、流れた先に穴を掘って水が溜まるようにしたりすることを繰り返し楽しんでいる。

子どもの姿	保育者の援助・環境構成・保育者の意図
<ul style="list-style-type: none"> <li>・築山で、3つに分かれているトイをスタートにコースをつくり、端のコースから流れた水を中央の水たまりに入るようにスコップで掘り進めたりしながら水が流れる様子や水が溜まっていく様子を喜び、繰り返し遊ぶ。</li> <li>・2人で山頂から水を流している時に、A児がペットボトルをコースに落として「あっ！」と言ったと同時に、B児が流す水の勢いによってペットボトルがコースを進んだ。A児は、困った表情から一転、笑顔になり「進んだー！」と笑う。</li> <li>・A児は、何かを思いついたように築山に登り、ペットボトルをもう一度コースに置き、水を流し進ませて笑う。B児「すごい！すごい！進んだ！」「ロケットみたい」と、飛び跳ねて遊ぶ。</li> <li>・A児も一緒に喜び、「もう1回ロケットしよう！」と、ペットボトルを一緒に流すことを繰り返し楽しむ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遊びの一員になって、子どもが面白いと感じていることに寄り添い、子どもが感じたままに共感するために同じ言葉を使って共感する。</li> <li>・「進んだね」と、少し驚きながら一緒に笑い、偶然の面白い現象に出会った子ども達が次にどうするのか様子を見る。</li> <li>・「進んだね」「本当だ！ロケットみたいだね」と共感し、B児の感じたことをA児に知ってほしいという思いで、A児に「Bちゃんがロケットみたいだって」と知らせる。</li> <li>・偶然の現象から面白い遊びが生まれたことを一緒に喜び、楽しい雰囲気になるように「うん！もう一回しよう」と、繰り返し遊ぶ。</li> </ul>

(反省・評価)

前日の面白かったことを思い出して遊び始めた。トイでコースをつくったり、地面を掘ったりして水が流れたり、溜まったりする水の性質に触れ、同じ遊びをする友達や共感する保育者がいたことで、より不思議さや面白さを感じながら遊ぶことを楽しんだ。その中で、偶然ペットボトルが水の勢いで流れて進むという新たな面白い遊びを発見し、繰り返し楽しむ姿に繋がった。



事例2 【5歳児】

「僕たち私たちの機関車」

～4歳児の時の子どもの姿～

機関車や電車、踏切など、乗り物に関連するものが好きな幼児が多く、戸外遊びでビールケースをいろいろな機関車に見立てて遊ぶことを楽しんでいて、年長児が実物の石炭の重さを計って見せにきてくれたことが刺激となり、石炭にも興味をもったこともあり、機関車について詳しく載っている絵本を見たりして、クラス全体が機関車に興味をもつようになった。

～5歳児の10月までの子どもの姿～

引き続き、ビールケースを機関車に見立て、食事をするところや料理をつくる場所、運転席などをイメージして遊んだり、友達と一緒に、空き箱などを繋げ、機関車や電車をつくったりしていた。また、近隣の大佛鉄道公園に行き、昔の機関車が走っていた駅を知ったり、車輪を見て大きさに驚いたり、運動遊び参観で銀河鉄道999の曲で演技し、銀河鉄道が走る映像を観たりしてきたことで、より機関車に興味や関心をもつようになった。そこで秋の遠足では「京都鉄道博物館」に行くことにした。本物のSLに乗り、「思っていたよりゆっくり進むね」「煙が白色から灰色に変わったよ！石炭が燃えているんだね」汽笛の音に「大きな音で怖い」と、多くの気付いたことを話していた。また「線路って太くて固いんだね」「鉄道博物館にある踏切は佐保川の踏切と違うね」など、色々な乗り物や、関連するものを見たり触れたり体験することができた。翌日から遮断機についてよく知っているA児とB児が、巻き芯を使って「本当の大きさの遮断機をつくりたい」と、一緒につくる姿が見られた。

【10月】 「遮断棒をつくろう」

子どもの姿	保育者の援助・環境構成・保育者の意図
<ul style="list-style-type: none"> <li>• A児とB児で画用紙を切って巻き芯に巻きつけ、遮断棒や警報灯をつくる。</li> <li>• 遮断棒が出来上がると「可動式にしたい」と話すA児。小さな空き箱を持ってきて、空き箱の先に切り込みを入れ、棒をかまして遮断棒を立て掛けるが倒れてしまう。 B児「ガムテープで箱の半分止めたら？」と、遮断棒を立て空き箱にできた半分ほどのスペースをガムテープで止める。 B児「A君、手を離していいよ」と遮断棒から手を離すが倒れる。 A児「ダメだ。倒れちゃうよ～」</li> <li>• A児は空き箱と遮断棒を交互にもち「この箱はすごく軽い！」「重たいもの…」と言いながら保育室を探す。</li> <li>• A児の様子をみて「私重たいよ！遮断機になるか」と提案するB児。遮断棒をもって動かす真似をする。</li> <li>• A児の「カンカンカン」という声に合わせて遮断棒を動かすB児。その様子を見て他児達も集まり、肩を持ち電車になって踏切を渡って遊ぶ。</li> <li>• 「切符つくろう」「線路もあったほうがいいんじゃない」「本物の大きさの電車をつくってみたい」など思いを出し合いながら遊ぶ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 素材の特性を考えながら用途に合わせて選択できるよう、巻き芯、段ボールなどを用意しておく。</li> <li>• A児、B児が可動式の遮断機を協力して、試したり工夫したりしながらつくれるよう見守る。</li> <li>• 倒れてしまう支えの空き箱が小さすぎるし軽すぎるのではないかと声を掛けようか迷うが、思いやアイデアを出し合いながら進めていけるようもう少し様子を見守る。</li> <li>• 困惑している様子なので遊びが継続できるように「遮断棒って重たいんだね」と伝えてみる。</li> <li>• 「重たい」というワードを出したことでA児B児がどうするのか様子を見守る。</li> <li>• さりげなく旗立台などを持ってこようと思ったがB児の提案を面白く思い様子を見守る。</li> <li>• 友達と工夫してつくる充実感を味わってほしいが、遊びが盛り上がり他児も参加するようになったので様子を見守る。</li> <li>• 子ども達のアイデアに耳を傾け、遊びが継続できるように思いや考えに共感し、受け止める。</li> </ul>

(反省・評価)

京都鉄道博物館に行った経験が、機関車や遮断機への興味や関心が高まり遊びへと繋がった。B児の「自分が重たい」という気付きから、どんどん遊びが発展していき、他児も加わり遊びの可能性が広がった。その後、「本物みたいな大きさのSLや新幹線などをつくりたい」という思いを実現するため、友達と考えを出し合いながらつくる姿となった。



【11月】 「みんなが乗れるように？本物みたいに？」

～その後の子どもの姿～

遮断棒が完成したことで「遮断機」「SL」「線路」「踏切」などをつくろうという話になり作品展で飾ることとなった。特にSLは本物のようにつくりたいという思いが強かった。「ライトはガムテープを貼り合わせて飛び出すようにしよう」「SLって黒くて光っていたよ。どうやって光らせよう？」「煙ははじめ白色で後から灰色になったから色をつけよう」など、色々な素材を工夫しながら思いを伝え合い、より本物らしくつくることを楽しんでた。完成し、客車とSLを繋いで置くところで、初めは「みんなに乗ったからみんなが乗れるようにしたい」と話し合っていたのだが、人が通れるようにするためには、SLの本体と客車に隙間をあけて置かなければならないことがわかった。

子どもの姿	保育者の援助・環境構成・保育者の意図
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ S Lと客車の置き方をみんなで話し合っている。A児B児が客車の扉と座席の間を人が通れるくらいあけて置こうとする。</li> <li>・ C児D児が「そんなに間あけたらS Lの部分と離れすぎて変だよ」と言い、客車の扉と座席を近づけて置こうとする。</li> <li>・ 他児達が「人が乗れるようになってみんなで決めたよ。これじゃ乗れないよ」と扉を動かそうとする。</li> <li>・ A児B児C児D児は「せっかく本物みたいに来たのに、これじゃ台無しだよ」と扉の取り合いをする。</li> <li>・ 「そしたらこうしよう！」と、E児は右側の扉は人が通れるくらいの間隙をつくり、左側は扉を座席にピッタリくっつけて置く様子を見せる。</li> <li>・ 「そうだね、片方空いてたら出たり入ったりできるもんね」と賛成の思いを口々に話す。</li> <li>・ C児とDは、少し不服そうではあるが「そうだね。そうしよう」と納得する。その後、客車に乗り「どこにいこうか」などみんなで遊ぶ姿が見られる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 子ども達同士で思いを出し合い進めてほしいので、近くで様子を見守る。</li> <li>・ C児D児の思いに他児たちはどう反応するか静かに様子を見守る。</li> <li>・ 保育者も静かに頷いたり傾聴したりする姿勢を見せ、子ども達が思いを話す姿を受け止める。</li> <li>・ 必要に応じて声を掛けることができるようタイミングをみて、声をかける。</li> <li>・ 双方の思いを聞いて考えを話すE児の思いを大切にしたいと思い「なるほど」と共感する。</li> <li>・ 賛成の方向に向かっているがC児D児の思いはどうなのか気に掛け様子を見る。</li> <li>・ 「みんなの思いが一つにまとまったね」と、それぞれの考えを出し合って折り合いをつけながらみんなで解決できたことを認める。</li> </ul>

(反省・評価)

昔、佐保地域を走っていた大佛鐵道がきっかけで、4歳児の頃から機関車を身近に感じていた。その中で、乗り物や地域への興味や関心が高まる環境の再構成を継続してきたことで「本物みたいなSLをつくりたい」という共通の思いをもった。つくる過程で、友達との思いや考えの相違が多くあり、その中で保育者が子ども同士で試行錯誤できるように見守ってきたことで、友達と一緒に思いに向かって実現していく経験ができた。



## 5. 研究の成果

4歳児は、前日の姿からすぐに遊び始められる環境や興味に応じた教材や用具を保育者がさりげなく環境構成したり、5歳児からの刺激を受けて興味や関心を広げたりし、人・もの・こととの関わりを喜んで主体的に遊び始めることがわかった。4歳児なりの気付きや発想を認めることで、「またしたい」と気持ちが持続し、思考力や判断力、表現力などの基礎を培う経験に繋がることができた。その経験をした5歳児は、更に「こうしたい」という思いに向かって今までの経験から友達と一緒に試行錯誤し、より深く人・もの・ことに関心を寄せて主体的に活動や遊びを進めていくことがわかった。

## 6. 今後の課題

子どもの主体的な姿を見つめ、保育者の援助や環境構成を見直す中で、改めて子どもの姿を見取り、理解しようとすることの大切さを再確認することができた。引き続き、子どもの姿に応じた保育の工夫に取り組んでいきたい。